

A・MUSEUM

vol.79
[2014.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



麦秋の朝 (第17回「いばらき自然環境フォトコンテスト」入選作品 撮影:岡 孝雄 撮影地:下妻市)

麦秋と筑波山

今回の茨城県の絶景は「ばくしゅう麦秋と筑波山」です。麦秋とは、おぎ麦の穂ほが実り収穫期を迎えた季節のことで、ちょうど5月下旬から6月初旬の初夏にあたります。麦秋は、麦が熟し麦にとっての収穫の「秋」であることから名づけられました。「ばくしゅう」、「おぎあき」または「おぎのあき」と読み、夏の季語になっています。

昭和30年代までは、おもに稲作の裏作として麦栽培が行われていました。その後、農家の減少などにより麦の栽培面積は激減しましたが、麦の生産振興により、現在一定の作付面積は保たれています。

茨城県の鳥は「ヒバリ」です。麦畑にはヒバリの巣がよくみられます。麦秋の季節に天高くさえずるヒバリの姿は、麦生産県である茨城県の原風景といえるでしょう。 (企画課 小幡和男)



ヒバリ

(撮影:石井光美)

開館
20周年記念
企画展

新茨城風土記 -ひとと自然のものがたり-

The story of nature and human activities in Ibaraki

奈良時代に編さんされた「常陸国風土記」の冒頭、常陸国の起こりが書かれた部分には、「古の人、常世の国といへるは、蓋し疑ふらくは此の地ならむか（昔の人が、常世の国といていたのは、おそらくこの国のことでしょう）」という文章があります。「常世の国」とは理想郷のことで、当時の茨城が豊かな自然によって、海の幸、山の幸に恵まれていたことや、農業や養蚕業などに励めば、すぐに豊かな生活ができるようになることが記録されています。

この、まるで「常世の国」のようだといわれた茨城県の豊かさは現在も変わりません。代表的な産業である農業では、農業産出額において2008年から5年連続で全国2位となっています。水産業では、2013年

の海面漁業の漁獲量は全国6位、内水面漁業の漁獲量は全国3位です。製造業も盛んで、2011年の製造業の総出荷額は全国8位となっています。

開館20周年を記念して開催する本企画展では、これまで当館が行ってきた企画展とは少し視点を変えて、茨城県の自然のすばらしさだけではなく、本県が誇る産業や文化に焦点をあてて紹介します。遙か1300年以上前の、当時の姿を伝える「常陸国風土記」にあやかり、現在の茨城県の風土（特に自然のようすと郷土の産業や文化）を未来に伝えたいと考え、タイトルは『新茨城風土記-ひとと自然のものがたり-』としました。茨城県の豊かな自然、そこに息づく人々との魅力的なかかわりをご覧ください。（教育課 石田容之）



シンボル展示：山と海の間を渡御する金砂大祭礼の神輿（撮影：太田俊彦）

展示構成

第1部

- ようこそいばらきへ！
- いばらきの昔の姿
- いばらきのひとと自然
 - ・山の章
 - ・平野の章
 - ・海の章
- 次世代に残したいいばらきの自然

第2部

開館20周年記念展示：博物館の20年を振り返る



こんんやく加工器具（所蔵：大子町教育委員会）



結城紬（所蔵：奥順株式会社）



あんこうのどぶ汁（提供：大津漁協直営市場食堂）

会 期 2014年7月12日(土)～2014年11月24日(月)

7月12日は午後1時からの公開となります。

開館時間 9:30～17:00（入館は16:30まで）

休館日 毎週月曜日

※7月21日(月)、9月15日(月)、10月13日(月)、11月3日(月)、11月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。

●自然観察会「霞ヶ浦の魚と漁」

日 時：8月3日(日) 10:00～12:00

場 所：稲敷市(現地集合)

対 象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

定 員：30名（抽選）

参加費：保険料1人につき50円

●自然観察会「地引き網を体験しよう」

日 時：8月17日(日) 9:00～12:00

場 所：日立市(現地集合)

講 師：舟橋正隆氏（茨城県環境アドバイザー）

対 象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

定 員：80名（抽選）

参加費：保険料1人につき50円

●自然観察会「陶芸のふるさと・笠間へ行こう」

日 時：8月24日(日) 9:40～14:00

場 所：笠間市(現地集合)

対 象：小学生以上（小学生は保護者同伴）

定 員：30名（抽選）

参加費：保険料1人につき50円

備 考：手ひねり体験料などの実費負担（4,000円程度）が必要

●自然講座「アンコウの吊るし切り見学・あんこう鍋体験」

日 時：10月12日(日) 10:00～12:00

場 所：日立市(現地集合)

対 象：どなたでも（小学生以下は保護者同伴）

定 員：30名（抽選）

Supported by 日本 THE NIPPON 財団 FOUNDATION

船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

この企画展は日本財団助成事業「船の科学館・海と船の博物館ネットワーク」の支援により開催いたします。

博物館の根幹を支える資料の収集と研究

20周年の振り返りと今後の展望

当館は今年の11月で開館20周年を迎えます。その節目の年にあたり、当館の足跡と今後の展望について4回シリーズで紹介したいと思います。その1回目はすべての博物館活動の基礎となる資料の収集と調査研究についてです。

「その館はいったいどれくらいのコレクションを持っているの？」当館の姉妹館であるロサンゼルス郡立自然史博物館を訪問した際、歓談中にピサノ館長が言った言葉が忘れられません。話題に上った博物館の規模をまずコレクション(資料)の数で評価しようとしたのが新鮮だったからです。博物館にはほかの教育施設や研究施設などと決定的に違うところがあります。それは膨大な資料を所有しているという点です。ここでいう資料とは、当館のような自然史系の博物館では、動物、植物、化石、鉱物などの標本ということになります。こうした資料が博物館で行われる研究、展示、教育活動などのすべての活動を支えています。私自身このことは承知していましたが、それでもピサノ館長から自然に出たその言葉は印象的でした。

当館は茨城県の博物館として、扱う資料も茨城県内のものが中心です。茨城には、いつ、どこに、どのような動植物がいたのか、どのような岩石が大地をつくっているのかなどを、資料とそれに付随する記録として保管していくことが当館の大切な使命です。これまでの収集活動の結果、当館には約35万点(2014年3月末現在)の資料が保管されています。そのうちの約60%はコンピューターのデータベースに登録され、その一部はインターネット上で公開されています。最近では公開された情報をもとに、外国の研究機関や大学からも問い合わせがくるようになってきました。

資料は研究されることによって価値が高まります。その資料は分類上のどの種なのか、その資料からどのような情報が読み取れるかなどについて調べていきま

す。研究によって得られた情報が多いほど、その資料の重要性は高まります。こうした研究の内容は論文として学術誌などに発表されますが、当館独自でも「茨城県自然博物館研究報告」などの出版物の発行により研究成果を発表しています。当館がこれまでに発行した報告書は47冊におよびます。また、当館では調査や研究の成果は、定期的に企画展を開催することにより一般の方々に公開するという方法もとってきました。

20周年を迎える今年は、これからの博物館を考えるよい機会となりますが、資料の収集と研究という活動については、これからも引き続き充実させていくことが必要です。研究資金の獲得、データベース化、収蔵庫の増設、研究時間の確保などのさまざまな課題を解決しながら、博物館の基盤を強固なものにしていきたいと考えています。また、こうした地道な活動が博物館にとって重要な部分だということを、広く県民に理解してもらおう努力も必要であると考えています。

ちなみに昨年100周年を迎えたロサンゼルス郡立自然史博物館の収蔵資料数は約3,500万点です。気の遠くなるような数字ですが、それは一つ一つの資料収集の積み重ねです。当館も努力を積み重ねて収蔵資料を充実させていきたいと思います。(資料課 滝本秀夫)



植物収蔵庫での研究のようす

シラサギ

梅雨の季節、河川や田んぼを散策すると、純白で清楚な細身の鳥をみかけます。シラサギです。この季節、野山や田の緑との対比でその白さが一層際立ち大変美しく、初夏には欠かせない風物となっております。

歌舞伎で「鷺娘」として上演され、また「白鷺城(はくろじょう、しらさぎじょう)」とよばれる城があるなど、日本人には馴染み深い鳥です。

純白の羽の秘密は、粉綿羽という特別な羽の先で白粉がつくられほか

の羽にすり込まれることによりです。

その大きさによりダイサギ、チュウサギ、コサギに分類されます。チュウサギは夏にだけ姿をみせるので、運がよければ3種ともみることが出来ます。水の中を長い足で歩き、小魚やカエルを捕らえ飲み込みます。

古来より縁起のいい鳥ともいわれています。今年は開館20周年ですので多くの方に来館いただいて、企画展とともにこの鳥を菅生沼で観賞いただきたいと思います。

コラム by director SUGAYA



イラスト：上脇田直子(ミュージアムコンパニオン)

菅生沼にクリハラリスが定着

研究ノート 1

クリハラリスと聞いてピンとこない方も、タイフンリスと聞けば、ご存じなのではないでしょうか。本来は、インドやミャンマーなどのアジア南部、中国南東部、台湾に分布する外来種で、日本では、鎌倉市などの神奈川県南東部、伊豆大島などをはじめ、国内の複数の地域に局所的に定着しています。日本には台湾南部から持ち込まれたと考えられ、2005年には特定外来生物の指定も受けました。体重は360g程度で、在来のニホンリス（体重250～300g）と姿が似ています。ただし、ニホンリスはお腹が白いことに対して、クリハラリスのお腹は灰褐色であることで区別できます。

さて、茨城県では2010年よりアライグマ防除実施計画を策定し、その根絶を目指して、市町村とともに奮闘しているところですが、クリハラリスの定着と繁殖が、この博物館のお膝元である菅生沼で決定的になってしまいました。じつはこの菅生沼でのクリハラリスを調べてみると、1990年代に地元のある方がリス園を作ろうと計画して、伊豆大島から生きたクリハラリスを計500匹ほど持ち込んで飼育した末裔であることがわかりました。当時、それらのリスたちは金網の飼育場で飼育されていましたが、脱走するリスもいたようです。

菅生沼周辺ではときどきリスの目撃情報があったのですが、最近そうした情報が増えてきました。そこで、博物館ではリス専門家の林典子氏から指導を仰ぎ、試験的なクリハラリスの研究捕獲をはじめました。その結果、想像以上に生息頭数が多いことが確認され、急遽、地元である坂東市、常総市、県の環境政策課と協議を行い、昨年度から、防除実施計画を両市に立てていただきました。試験捕獲の結果は、菅生沼北東部だけで、この1年間で69頭ものクリハラリスを捕獲する事態になっています。その中には、若い個体も含まれ、この地での繁殖は確定的です。

博物館では、捕獲されたクリハラリスの年齢構成、性別、繁殖状態などを調べて、今後の増加予測などを行っていく予定です。一方で、より詳細な定着範囲の情報を収集して、効果的な捕獲を行う必要がありますが、残念ながらまだ不十分です。坂東市、常総市でも、住民の方々からの通報が少なく、防除実施計画に沿った対策を進められていない現状があります。クリハラリスは、野鳥の卵を食害する可能性もあり、自然環境保全地域である菅生沼の在来生態系への影響も心配されます。クリハラリスをみかけた際は、ぜひ博物館や地元市役所までご連絡ください。（教育課 山崎晃司）



クリハラリス

(提供：林 典子)



ツバキの樹皮についてクリハラリスのかじり痕

マンボウ

マンボウという魚は、ユニークな外見で有名ですが、その生態についてはまだ謎が多くあります。今回はそのマンボウを紹介します。

まず、特徴的なのはその大きさです。大きいもので全長3m、体重は2tにもおよびます。第3展示室にあるマンボウの剥製は、全長が2.5m、体重が1.5tもあり、マンボウの標本としては世界最大級です。またその大きさに関わらず多くの卵を産みます。脊椎動物の中では一度に生

む卵の数が最も多く、一度に3億個もの卵を産むといわれています。しかし卵は保護されることなく、海中を浮遊するのでほとんどがほかの生物に食べられてしまいます。そんななか、世界最大級まで成長することができた、第3展示室のマンボウはマンボウ界のエリートといってもよいかもしれません。

※近年の研究により、マンボウは「マンボウ」と、より大型になる「ウシマンボウ」の2種にわけられ

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

ることが明らかとなりました。当館の剥製は「ウシマンボウ」であることがわかっています。

(ミュージアムコンパニオン 制野友衣)



ウシマンボウ

ハマボウフウの隠された姿を追う

研究ノート 2

今回は2013年6月29日に植物研究室で行った鹿嶋市での海浜植物の調査を紹介しします。この調査は、7月12日から開催予定の開館20周年記念企画展「新茨城風土記-ひとと自然のものがたり-」において、茨城の自然を紹介するために行われたものです。

海浜植物は、日差しが強い上に保水性が乏しく砂に埋まりやすい砂浜環境で生きています。そのため、クチクラ層が発達した厚い葉をもつ、地下茎を広範囲に広げる、地下深く根を伸ばすなどの特徴をもっています。今回の調査ではこのような海浜植物の特徴がわかる標本の採集・作成を目指しました。調査対象の1つとなった植物はハマボウフウです。

ハマボウフウは海岸の砂地に生えるセリ科の多年草で、地中に長い根を伸ばすことが知られています。また、若葉を刺身のつまにしたり、根を漢方薬にしたりして、古くから人のかかわりが深い植物でもあります。海浜植物の特徴がわかりやすいだけでなく、ひとと自然のものがたりをつづるうえでも最適の植物ともいえます。

私たちが調査した海岸では、スカシユリ、ツルナ、ハマヒルガオ、ハマニガナなどが目立ちましたが、そのなかに混じって、ハマボウフウの生育を確認するこ

とができました。広範囲に地下茎を伸ばすハマヒルガオ、ハマニガナを1株ずつ掘り出したあと、周辺を大きく掘っても大丈夫そうな場所を選び、ハマボウフウを掘りはじめました。

ハマボウフウは、ゴボウのように太く長い根が伸びるといわれますが、砂の中のように外からは見えません。根から離れたところは大胆に掘り、根の近くは細心の注意を払って掘り進めます。地表付近のハマボウフウの根は、直径1cmほどでしたが、下に行くにつれて太くなっていきます。穴を広げながら掘り進め、深さ100cmを超える頃には、穴に入ってしゃがみこみながらの作業になりました。

根を切らないようさらに慎重に掘りますが、作業はなかなか進みません。お昼を過ぎ、暑さもピークにさしかかろうとする頃、突然先端が現れ、無事に掘り出すことができました。達成感と喜びの中、さっそく根の長さを測りました。根の長さは140cm、太さは太いところで直径3cmほどありました。

根があまりに長く太いため、標本の作成は困難を極めました。みなさんにハマボウフウの根をみていただけるよう現在準備中です。今夏の企画展での公開をご期待ください。(資料課 宮本卓也)



ハマボウフウ調査の様子



掘り出したハマボウフウ

アカエイ

アカエイは日本の沿岸に生息し、砂泥底でみられる魚です。甲殻類やゴカイ類などを探して食べやすいように口はお腹側にあります。

当館ではアカエイを海の水槽で展示しています。餌を撒いてみると口の位置がお腹側にあるため下側の餌しか食べられず、上にいる魚たちに餌を取られてしまいます。そこで飼育員は確実に食べさせるため、ある工夫をしています。当館のアカエイは飼育員に馴れており、飼育員の手

から直接餌を食べさせることができます。お互いにタイミングが合うとアカエイは餌に覆いかぶさり、一瞬で飲み込んでしまいます。その際に飼育員は、アカエイが痩せていないか、傷はないかなどしっかりと観察し、健康管理も行っています。

しかし、うっかりしているとほかの魚に手を噛まれる心配があるので、私たちも注意しながら行っています。アカエイとの「あ・うん」の呼吸で確実に餌を食べてもらえるよう、

おさかな通信

日々努力しています。

(水系担当 新田雄紀人)



アカエイ

新しくなったコーナーを紹介します

博物館には、展示室のほかにも野外施設や図書室、セミナーハウスなど学習や休憩に利用できるスペースがたくさんあります。そのなかで2013年度に展示替えを行ったおもなものをご紹介します。

・「図書室ビデオブース」

当館の図書室にあったビデオブースはこれまでVHSテープを用いていましたが、今年4月から新たにデジタル映像を各ブースに配信するシステムが導入されました。ビデオの内容も一新され、海外のドキュメンタリー放送であるディスカバリーチャンネルやナショナルジオグラフィックチャンネルなど、合計172本を高画質の映像でみることができます。このなかには当館で制作されたオリジナル映像もあります。「宇宙」「化石・恐竜」「動物」など9つのテーマにわかれて

いますので、自分の好きな映像を選んで鑑賞することができます。リニューアルしたビデオブースを、ぜひご利用ください。

・「初代館長中川志郎蔵書コーナー」

本館1階ディスカバリープレースの一番奥に、「初代館長中川志郎蔵書コーナー」がオープンしました。

故中川志郎氏は当館の初代館長として数多くの業績を残されました。中川氏は平成24年7月に亡くなりましたが、その後ご遺族から、1,700冊を超える蔵書が博物館に寄贈されました。中川氏の著書や愛読書など、ここではその一部を紹介しています。ベンチもあり、くつろげるスペースとなっています。展示された図書をひもときながら、ゆったりとした時間をすごしていただきたいと思います。（資料課 諸橋靖子）



図書室ビデオブース



初代館長中川志郎蔵書コーナー

当館ボランティアが「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰の受賞

当館のボランティアが「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞しました。

この表彰は1999年度から、都道府県および関係団体から推薦のあった自然環境に関する先駆的・先導的活動を行った個人・団体について、環境大臣が毎年「みどりの日」に表彰を行っているものです。

表彰式は4月23日に東京都の新宿御苑インフォメーションセンターで行われ、ボランティア代表の今村敬氏が出席しました。この授賞式には、全国から推薦され、表彰を受けた計37の団体・個人の方が参加しました。当館ボランティアは「自然ふれあい部門」での受賞となりました。

「自然ふれあい部門」は、自然とのふれあいに関する各種活動や行事を推進した者などが対象で、まさにボランティアが主催している「ふれあい野外ガイド」や「とびだせ！子ども自然教室」などの来館者向けイベントでの実績が評価されたものです。さまざまな教育普及活動において、ボランティアが自然科学と博物館を好きになるような雰囲気をつくっており、リピー

ターの増加につながっているものと感じます。

ボランティアは、自然博物館の創立時から館とともに活動を行っている博物館のよきサポーターです。今回の受賞は、開館20周年の記念すべき年にボランティアの活動が評価されるよいできごととなりました。この表彰を誇りに、今後もボランティアとともに歩みながら、皆さんに親しまれる博物館をつくっていきたいと思います。（教育課 小泉直孝）

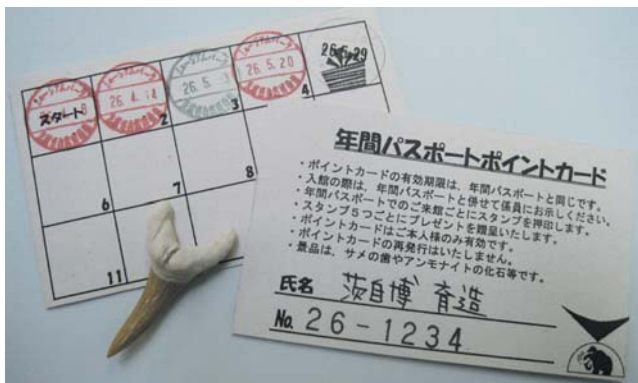


受賞の報告 当館の菅谷館長(左)とボランティア今村代表

トピックス

○年間パスポートポイントカードをはじめました

当館では、皆さんに自然博物館をさらに身近なものとして楽しんでいただくため、購入から1年間何度でも入館ができる年間パスポートを販売しております。また、平成26年4月1日から、当館に繰り返しご来館していただくきっかけづくりの一環として、年間パスポートの購入者に「年間パスポートポイントカード」の配布をはじめました。来館の際に年間パスポートとあわせてポイントカードを呈示いただくと、裏面にスタンプを押します。スタンプを5つ集めると、素敵なプレゼント（アンモナイトの化石・サメの歯の化石・恐竜の糞の化石など）を差し上げておりますので、ぜひ繰り返しご来館ください。また、ポイントカードに付いているご紹介カードにて、新たにお客様を紹介していただいた場合にもプレゼントを用意しております。4月1日より前に年間パスポートをご購入された方にも、年間パスポートの有効期限内であればポイントカードをお渡しいたしますので、2階案内カウンターにて職員へ申し出てください。（管理課 石塚美穂）



ポイントカードとサメの歯の化石(景品)

○ウェブサイトをリニューアルしました

3月末に当館のウェブサイトのトップページが変わりました。レイアウトもデザインも大きく変わったので驚いた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

当館のウェブサイトは開館後まもなく開設され、これまで、収蔵資料のデータベースやキッズコーナーなど、コンテンツの充実に努めてきました。

このようななかで、デザインの不統一やページ構成の複雑化など、閲覧上不都合なことも出てきました。

そこで今回、イラストの入った大きなメニューボタンを設置したり、刊行物や資料検索などの閲覧頻度の高いコンテンツへアクセスしやすくしたりするなど、みやすさ、使いやすさを重視したデザインと構成に変更しました。

さらに、Facebookのページもあわせて開設しました。こちらはイベントや展示替えなどの当館の最新の情報をお伝えしていきます。投稿した情報に対し、多くの方が

ら温かい反応をいただいております。友の会でもTwitterを開設しております。あわせてご覧になってください。

皆さんと一緒に今まで以上に魅力あるサイトづくりをしていきたいと思っております。ぜひ一度新しくなったホームページをご覧ください。（資料課 野堀秀明）



ウェブサイトのトップページ

○「地球再発見～いばらき自然ものがたり～」出版!!

今年3月、当館の学芸員が執筆した単行本「地球再発見～いばらき自然ものがたり～」が茨城新聞社より出版されました。この本は『茨城新聞』の若者向けページ「KIRAっと!」において、「地球再発見」というテーマで茨城の自然について連載された記事をまとめたものです。今回の単行本化にあたって、2009年4月から2013年3月までの全199回の連載から144回を厳選し、最新の情報に加筆・修正いたしました。内容は「植物の四季」「動物の四季」「茨城の地学」「茨城の外来生物」の4章構成で、これ1冊で茨城の自然をまるごと知ることができます。身の回りで観察できる動植物や、博物館でみることができる化石など、親しみやすいトピックが揃っており、子どもから大人までお楽しみいただける、わかりやすい内容となっています。みやすいフルカラーの写真付きで、定価は一冊1,500円（税別）です。「地球再発見～いばらき自然ものがたり～」は書店および当館ミュージアムショップでも取り扱っておりますので、ぜひお手に取ってください。（教育課 加藤太一）

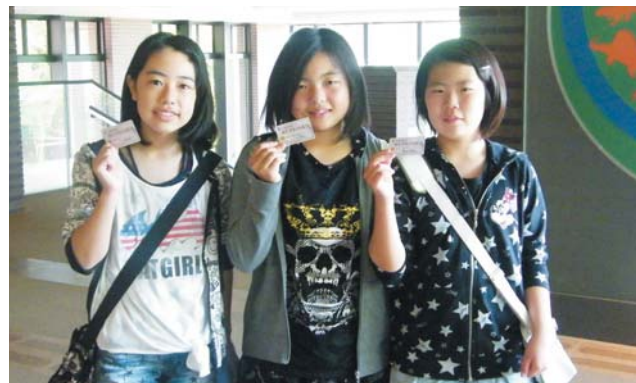


地球再発見～いばらき自然ものがたり～

「中1フリーパス」を贈呈しました



中1フリーパス贈呈式（県教育長室にて）



中1フリーパスを使って来館した中学生

当館は今年11月に開館20周年を迎えます。それを記念して、このたび県内のすべての新中学1年生に、「茨城県自然博物館中1フリーパス」を贈呈しました。

中1フリーパスは、中学1年生が無料で何回でも当館に入館できる年間フリーパスです。また、中学1年生の間に1回以上来館することにより2年生まで、さらに、2年生の間に1回以上来館することで3年生まで有効期限が延長されます。

当館では、中学生の理科の学習に役立つ展示が多数ありますが、残念ながら来館する中学生は小学生に比べて少ない傾向にありました。そこで、中1フリーパスには、たくさんの中学生に来館していただきたいという思いが込められています。4月10日には、茨城県内の中学1年生を代表して水戸市立双葉台中学校の津野斐美さん、高倉健太郎さんの2人に、茨城県庁にて県教育長から中1フリーパスが贈呈されました。真新しい制服姿の2人は少し緊張したようでしたが、「中1フリーパスを使ってどんどん博物館に行きたい」「中

学校では勉強も部活も頑張りたい」と話してくれました。

当館はさまざまな展示物をみたり、実際に野外で自然とふれあったりすることのできる、自然科学の学習に最適な施設です。当館をもっと利用してもらうことで、理科好きの中学生が増え、「科学技術創造立県いばらき」の将来を担う人材が育ってくれることを願っています。

中1フリーパスで来館していただいた皆さんには、博物館での学習を手助けするプレゼントも用意しています。たくさんの中学生の皆さんの来館をお待ちしています。（企画課 鈴木 肇）

編集後記

4月に赴任して、自然博物館ニュース「A・MUSEUM」の編集担当となりました。歴史ある広報誌ということで、身の引き締まる思いがしております。

勤務してみると、職員をはじめ、携わっている方々の情熱が伝わってきます。その「思い」を誌面で皆様にお伝えしていきます。よろしくお願いたします。（K・N）

交通案内



＜車ご利用の場合＞

●常磐自動車道谷和原ICから20分

＜鉄道・バスご利用の場合＞

- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井庫車行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
 - つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	740円 (600円)	530円 (430円)	210円 (100円)	1,540円
高校・大学生	450円 (310円)	330円 (210円)	100円 (50円)	1,030円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	310円

(注)：()内は団体料金(20名以上)

未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日) ●3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※7月21日(月)、9月15日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※6月23日(月)～6月28日(土)は館内整理のため休館となります。



【開館時間】

9:30から17:00まで
(入館は16:30まで)
※ペット、遊具、テブル、椅子及びテント等のお持ち込みはご遠慮ください。

自然博物館ニュース A・MUSEUM (ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT + MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課／発行2014年6月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp

※当館が開館20周年を迎えるにあたり、開館10周年から使用してきたキャッチコピー「過去へのとびら 未来へのとびら みんなでひろく ミュージアムパーク」に代わる新キャッチコピーを募集いたします。詳しくは館内掲示や当館ホームページでご確認ください。